

出身大学の卒業生らが集まる校友会を通じて、社会貢献活動に励むシニアが目立つようになってきた。子どもへの運動指導や国際交流、市民講座の開催など多彩。旧交を温めるだけでなく、社会との関わりを強く意識しているようだ。

「よろしくお願いします」。小学生の元気な声が体育館に響く。笑顔で応じたのはシニアの男女10人。タオルを両手で引っ張りながら、体をねじったり、手を上げたりする動作をみせる。一緒に体を動かしてもらいつつ、あいさつやお辞儀の仕方も教えていく。

指南役の男女は早稲田大学の校友会支部、武蔵野稲門会の有志だ。地元・東京都武蔵野市の補助を受けて年に数回、体幹を鍛える運動や礼儀の大切さを教える「マナーキッズ教室」を市内の千川小学校と風の子保育園で開いている。

メンバーの一人、山口光朗さん(74)は元銀行員。現役時代は仕事が忙しかったが、定年を迎えた60歳の頃、時間にゆとりができて入会した。当初は野球の早慶戦の応援などを楽しんでしたが、次第に仲間内だけの集まりに物足りなさを感

セカンドステージ

大学の「校友会」で社会貢献

子どもに運動・マナー指導や市民講座開催

じるようになったという。そんな時に合ったのがこの教室だった。

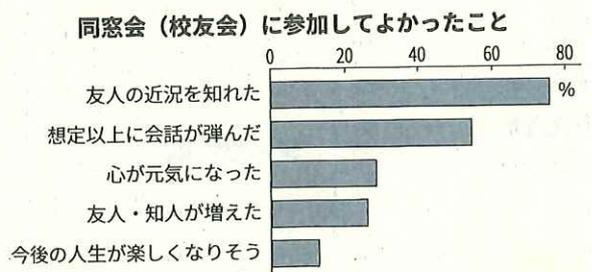
「お世話になった社会にお返しをしたかった。最初はいいさつがでなかった子が次回はできるようになる姿を見ると、やってよかったと思う」と山口さん。

校友会という、懇親会や運動部の試合観戦が一般的。ただ山口さんのように社会と接点を持つ活動を望む人も珍しくない。

名城大学校友会では名古屋市内にある校友会館を一般に開放し、市民公開講座を開いてきた。大学の教授らを講師に招き、消費税や自動車運転技術の動向といった社会的にも関心の高いテーマを話してもらっている。これまでに13回開き、毎回50人以上が参加する。

卒業生集い地域に恩返し

講座を提案した一人が山田弥一さん(75)。愛知県警を60歳で退職後、行政書士の資格を取り個人事務所



定年退職など入会の契機に

定年退職など人生の節目を迎えたり、時間的余裕ができた時、入会する契機になりやすいという。校友会活動を支援する笑屋(東京・千代田)が500人に聞いた同窓会(校友会)アンケートによると、行きたいタイミングの1位は「年齢の節目」で39%。次が「自分の時間ができた時」の20%だった。参加してよかったことは「友人の近況を知れた」「想定以上に会話が弾んだ」「心が元気になった」が上位。比較的気楽に参加できる点が受けているようだ。笑屋の真田幸次社長は「卒業生を講演会などイベントに招くホームカミングデーを開く大学が増えた」と話す。少子化で経営が厳しいなか、卒業生とのつながりを強め大学の価値を高める狙い。大学と卒業生の距離が縮まれば、校友会もより身近になりそうだ。(高橋敬治)



武蔵野稲門会の有志は体幹を鍛える運動を子どもに教える活動も(東京都武蔵野市、2018年に開いた教室)

を開設。時間に余裕ができ校友会に入った。その熱心な活動ぶりから会長に就任。「大学も地域に支えられていて、何か恩返しをしたかった」と語る。中央大学学員日華友好会は国際交流に力を尽くしてきた。学員は中央大の卒業生のこと。太平洋戦争の混乱で台湾に帰らざるを得なくなった元留学生のため、大学が1999年に台北で特別卒業式を開いたのをきっかけに設立された。留学生との交流のほか、現地の公園などに桜の木を植える植樹活動を続けてきた。

町田武さん(80)は60歳で印刷会社を定年退職。台湾との縁はなかったが、友人に誘われて活動に加わった。植樹祭などで現地を訪れたのは30回近い。「少しでもお役に立てればうれしい」と町田さん。こうした活動もあって台湾の10大学が母校の協定校となっており、学生や教員同士の交流も進んでいるという。最近では新型コロナウイルスの感染拡大を受け、こうした活動は中断を余儀なくされているところが多い。ただ「感染状況が落ち着けば、ぜひ再開したい」(武蔵野稲門会の山口さん)というのが参加者に共通する思いだ。校友会は高校などにもあるが、全国規模の組織を持つ大学の校友会は居住地を問わず参加しやすい。仕事一筋だった男性が定年後に地域活動をしたくても、どこに行けばいいかわからないケースは多い。気心の知れた仲間がいる大学の校友会はそうしたシニアが求める次の居場所になりやすいのかもかもしれない。

地域社会貢献活動「マナーキッズ教室(平成30年度武蔵野市子ども文化・スポーツ体験活動支援活動事業)」

やまぐち みつろう
山口 光朗(1970・政経)

武蔵野の街に「美しい姿勢、美しい挨拶ができる子ども達」「未来を担う体力のある元気な子ども達」を増やして行こうという武蔵野稲門会の地域社会貢献活動、マナーキッズ教室(平成30年度武蔵野市子ども文化・スポーツ体験活動支援活動事業に認定されています)は今年で3年目を迎えますが、平成30年度も3回にわたって行いました。武蔵野市立千川小学校で平成30年12月7日に1年生2年生86人を対象にマナーキッズ体幹遊び教室、風の子保育園では平成31年2月18日に4歳児5歳児16人、2月25日に3歳児11人を対象にマナーキッズ体幹遊びに加え、手のひらテニス教室(幼児用に開発されたテニスラケット使用)を開催。公益社団法人マナーキッズプロジェクト田中日出男理事長(早稲田大学テニス部OB元主将 当会会員)を講師に招き、武蔵野稲門会員有志(諸江昭雄、角田正三、杉原鉄夫、牛込秀三、松本誠、徳田直子、佐川素子、片岡冬里、山口光朗)が交代で参加、和気あいあいの雰囲気の中で体幹補強運動と挨拶マナー指導を丁寧に行いました。

「マナーキッズプロジェクト」は早稲田大学テニス部が地域社会貢献活動として行った平成8年の小学校テニス教室がルーツです。以来47都道府県において約48万人の小学校児童、幼稚園・保育園児が参加する内閣府所管の公益社団法人に発展、昨年度からは台湾でも始まり、本年7月にはマレーシアにおいて開催します。文部科学大臣杯マナーキッズショートテニス全国小学生団体戦やマナーキッズ大使海外派遣(英・米・豪・台湾等)も継続的に毎年行っています。少年少女が勝ち負けや技量を競うだけでなくスポーツマンシップの大切さや体力の基礎向上(体幹運動)、人間関係の基礎になる美しい挨拶マナーが楽しく同時に身に付くのが特長で地道に裾野が広がっています。今回武蔵野市で行なった「マナーキッズ体幹遊び」はその中の一つの好評プログラムで、早稲田大学蹴球部OBで公益財団法人日本サッカー協会の川淵三郎相談役(マナーキッズプロジェクト最高顧問)が子ども達の体幹の劣化を憂えこれを鍛える為に発案したスポーツ

科学的で遊びながら体幹が鍛えられ美しい姿勢マナーも同時に身につく面白い実践内容で新聞等でも度々紹介されているものです。具体的プログラムは、身近なタオルなどを使って体力低下・運動機能の低下に歯止めをかける「体育」、スポーツマンシップと挨拶・礼儀作法の基本的マナーを習得させる「徳育」、運動で知性を育む「知育」がバランス良く組み込まれています。何やら早稲田が得意とする分野で且つ少年少女の教育と言う知的社会貢献活動でもありましたので指導にあたった武蔵野稲門会OB・OGの面々も満足顔で、自身の心身の老化防止にも役立ったような気がしました。簡単な補助的な内容ですので是非とも会員皆様のご参加をお願いします。詳細は<http://www.mannerkids.or.jp/>



虎ノ門カレッジ法律事務所

弁護士 福原 弘

(1969年法学部卒。東京弁護士会所属)

〒105-0001

東京都港区虎ノ門1丁目1番23号 虎ノ門東宝ビル3階

TEL 03(3597)5755 FAX 03(3597)5770